

創世記13章「見かけに頼らず、約束を握る」

13:1 それで、アブラムは、エジプトを出て、ネゲブに上った。彼と、妻のサライと、すべての所有物と、ロトもいっしょであった。 13:2 アブラムは家畜と銀と金とに非常に富んでいた。 13:3 彼はネゲブから旅を続けて、ベテルまで、すなわち、ベテルとアイの間で、初めに天幕を張った所まで来た。 13:4 そこは彼が以前に築いた祭壇の場所である。その所でアブラムは、【主】の御名によって祈った。 13:5 アブラムといっしょに行ったロトもまた、羊の群れや牛の群れ、天幕を所有していた。 13:6 その地は彼らがいっしょに住むのに十分ではなかった。彼らの持ち物が多すぎたので、彼らがいっしょに住むことができなかつたのである。 13:7 そのうえ、アブラムの家畜の牧者たちとロトの家畜の牧者たちとの間に、争いが起こった。またそのころ、その地にはカナン人とペリジ人が住んでいた。 13:8 そこで、アブラムはロトに言った。「どうか私とあなたとの間、また私の牧者たちとあなたの牧者たちとの間に、争いがないようにしてくれ。私たちは、親類同士なのだから。 13:9 全地はあなたの前にあるではないか。私から別れてくれないか。もしあなたが左に行けば、私は右に行こう。もしあなたが右に行けば、私は左に行こう。」 13:10 ロトが目を上げてヨルダンの低地全体を見渡すと、【主】がソドムとゴモラを滅ぼされる以前であったので、その地はツォアルのほうに至るまで、【主】の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた。 13:11 それで、ロトはそのヨルダンの低地全体を選び取り、その後、東のほうに移動した。こうして彼らは互いに別れた。 13:12 アブラムはカナンの地に住んだが、ロトは低地の町々に住んで、ソドムの近くまで天幕を張った。 13:13 ところが、ソドムの人々はよこしまな者で、【主】に対しては非常な罪人であった。 13:14 ロトがアブラムと別れて後、【主】はアブラムに仰せられた。「さあ、目を上げて、あなたがいる所から北と南、東と西を見渡しなさい。 13:15 わたしは、あなたが見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫とに与えよう。 13:16 わたしは、あなたの子孫を地のちりのようにならせる。もし人が地のちりを数えることができれば、あなたの子孫をも数えることができよう。 13:17 立って、その地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに、その地を与えるのだから。」 13:18 そこで、アブラムは天幕を移して、ヘブロンにあるマムレの樫の木そばに来て住んだ。そして、そこに【主】のための祭壇を築いた。

導入

先週は創世記12章を学びました。そこで、アブラムに対する神の召しには、4つの約束があることがわかりました。神は、民を約束なさいました。アブラムの子孫を大いなる国民とするという約束です。

次に土地を約束なさいました。アブラムに新しい故郷を与えるとおっしゃいました。アブラムは、約束をいただいたときにはそれがどこか知りませんでした。しかし、後にそれがカナンの地であることがわかりました。神はアブラムに守りも約束されました。神は、アブラムを支援する人たちには祝福を、敵対する人たちには呪いを与えるとおっしゃいました。最後に神はご計画を約束なさいました。アブラムは、神が全世界に祝福をもたらす媒体となるのです。

次に、アブラムの召しは歴史的にも個人に目を向けても説明できないとお話しました。ただ唯一の説明は、神の恵みです。アブラムに対する神の召しは成功しました。アブラムが信仰をもって神のことばを信じたからです。妻サライが不妊だったことや、約束された土地が悪い人たちに占領されていたことから、アブラムに対する神の約束は不可能に思えましたが、この約束をなさったお方は、それを成就する力のあるお方でした。

また12章で、アブラムは信仰の危機を経験しました。住んでいた土地に飢きんがあり、彼は食物を得るために、家族を連れてエジプトに下りました。そこで起こった信仰の危機とは、彼が妻サライのことで嘘をついた出来事です。彼は、いっしょにいる美しい女性が自分の妻だとエジプト

の高官たちに知られたら、妻を取り上げられて殺されると恐れました。その考えは間違っていました。神のことばではなく、サタンに思いを影響されてしまったのです。

すべてはうまく行ったかのように見えました。アブラムは必要なものに加え、たくさんの家畜と奴隷を得ました。しかし、神はアブラムの嘘を見逃されませんでした。それで、パロの家にひどい災害をもたらされました。結局パロは、その美しい女性がアブラムの妹ではなく妻であることを知りました。パロはアブラムとサライの一行をすべての所有物とともにエジプトから去らせました。

アブラムは罪を犯しましたが、神の主権がそのなりゆきを覆し、アブラムに対する約束を成就しようとなさる神のご計画は続行しました。それがふいになることはなかったのです。

では、創世記13章に学びをすすめ、アブラムが間違った選択をした後どのようなことが起こったか見ていきましょう。

13章は、4つの部分に分けることができます。

1. 悔い改めたアブラム (1-4節)

アブラムは、妻を妹と偽ったせいでエジプトを追放されました。もっとひどい罰を受ける可能性もありましたが、エジプトの王は、エジプトの神々よりもはるかに力のある誰かがアブラムの背後にいることを悟ったのでしょう。

アブラムがエジプトを去った時、物質的には富んでいましたが、霊的には困窮状態でした。

アブラムは自らの過ちと向き合わなければなりません。過ちの原因は、神のご計画と神のみことばの約束よりも、自分の算段を頼りにしてしまったことです。

長い旅路を経て、彼は神に祭壇を築いて神の御名で祈った場所に戻ってきました。そこは、彼が最初に神を礼拝した場所でした。

アブラムは道々、エジプトで起こった出来事を思い起こしていたことでしょう。そして、神が約束なさったすべてのことに対する疑いはまったく消え去ったことでしょう。大いなる国民になるという約束、その国民が住むべき土地についての約束、その民を守るという約束、そして、アブラムの子孫をとおして全世界が祝福されるという約束です。

アブラムは、神がエジプトでパロ一家にひどい災害をもたらしてアブラムを救ってくださったと確信したはずで

では、このような恵みを神に注いでいただいたアブラムは、これにどう応えたでしょう。

聖書は、アブラムが最初に「祭壇」を築いた場所に戻って、そこで「主の御名によって祈った」と語ります。

「主の御名によって祈る」とは、神を礼拝することです。また「祭壇」とは、罪の贖いのために動物がいけにえとしてささげられる場所です。

アブラムは、妻のことで嘘をつき、神に対して罪を犯しました。ですから、この問題について神と和解する必要があります。そのために、祭壇で動物をいけにえとしてささげます。

アブラム自身が罪のために死ぬ代わりに、動物に身代わりとなって死んでもらうのです。

アブラムの罪を批判する前に、私たちは神が聖なるお方であることと、私たちも罪を犯すことがあるということを認識しておかなければなりません。私たちにも神の掟を破った罪

があるのです。聖書は、罪の報酬は死だと語ります。私たちも神からの罰を受けるべき者です。

しかし、私たちには罪を悔い改めて神に赦しを請える場所が与えられています。それは、「主イエス・キリストの十字架」という場所です。

神は、2000年前にイエスが十字架上で死んで成し遂げてくださった御業に基づいて、私たちの罪を赦してくださいます。

イエスのいのちは、世界中の罪のために身代わりのいけにえとしてささげられました。

ヨハネ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

私たちはこの場所に度々立ち戻らなければなりません。私たちは過ちや罪を犯してしまう者だからです。

イエスは、私たちを赦してきよめることのできるお方です。そうしていただくなら、私たちは再び立ち直って神についていくことができます。

赦しの例話

イギリスのあるところに、教養のある若者がいました。彼は、母親に対して悪いことをし、家を出ました。そして、近くの町に身を隠し、マクドナルドで働き始めました。しばらくすると、彼は自分の過ちに気づき、母親に謝って赦してもらいたいと思うようになりました。

けれども、母親が赦してくれるかどうかわかりません。それで、母親宛てに手紙を書くことにしました。

手紙にはこう書かれていました。「お母さん、ごめんなさい。家に帰ってもう一度やり直したい。もし赦してくれるなら、庭の木に白いタオルを結んでおいてください。僕が列車で家の前を通った時、見えるように。白いタオルが見えたら、お母さんが赦してくれたことがわかるので、列車を降りて会いに行きます。もしタオルが見えなかったら、列車を降りずにどこか遠くへ行くことにします。」

若者は母親に手紙で書いたとおりに、列車に乗りました。列車は駅に近づくと、ゆっくりと彼の家の前を通りました。若者は、庭の木に白いタオルが結んであることを願いながら、窓の外を見つめました。すると、そこには驚くべき光景が広がっていました。

庭の木は、白いタオルで埋め尽くされていました。庭の芝生も白いシートでいっぱい、青草が見えないほどでした。学生の時の制服の白シャツも、物干し台につるされていました。庭はまったくの白一色でした。

この光景を見た若者の目からは涙があふれました。

この母親は息子のことを赦していました。そして、信じられないほどの深い愛で愛していることを息子に示しました。

イエスをとおして私たちが得る神との関係も、このようになり得ます。

私たちは、すべての反逆行為は神に対するものだということを知る必要があります。神は私たちをお造りになりました。ですから、私たちとつながることを望まれます。けれども、多くの場合私たちの過ちが、私たちの天国の父である神と真の意味でつながる絆を阻害しています。

イエスのもとに来て、謝って赦してもらうことを恐れる必要はありません。

イエスは赦してくださいませ。ご自身が私たちの罪と過ちのために死んでくださったのですから。

ハレルヤ！このお方はすばらしい救い主です。

2. 謙虚なアブラム (5-9節)

アブラムと甥のロトには、家畜も財産もたくさんあり、いっしょに暮らすには手狭になったと、聖書は語ります。その上、ふたりの家畜の世話をする牧者たちの間にいさかいが起こるようになりました。誰にその土地の権利があるかといって争っていたようです。

人のいるところには必ず争いが起こると言われますが、そのとおりです。それは、アブラムの時代も今も同じです。しかし、この個所での人間関係の問題に対するアブラムの対処には感心させられます。

8節から、牧者たちの争いで家庭不和にならないことをアブラムが願っていたことがわかります。アブラムは「親類同士なのだから」と言って、けんかを避けようとしてしました。

創世記11：27から、ロトがアブラムの甥だったことがわかります。彼らは親せきでした。

9節で、アブラムはロトに、先に土地を選ぶ権利を譲りました。

これは、驚くべきことです。と言うのも、当時の文化ではアブラムが家長であり、家族の中であらゆる優先権を持っていたからです。

しかし、アブラムは大きな問題になるのを避けるためにへりくだって、土地を先に選ぶ権利をロトに譲りました。

アブラムは、あなたが左の土地を選ぶなら、私は右の土地を得よう。あなたが右の土地を選ぶなら、私は左の土地を得ようと言いました。

アブラムは、非常に謙虚な態度を示しました。

アブラムの考え方は、エジプトから明らかに変わりました。彼は、自分の住むところについても神の主権が状況を支配すると信頼できるようになりました。

アブラムは、神がアブラムとその子孫にカナンの地を約束されたことをわかっていました。ですから、この状況も喜んで神にゆだねたのです。

詩篇25：9には、「へりくだる者を公義に導き、へりくだる者にその道を教えられる。」とあります。

神は確かに、自らへりくだったアブラムを教え導いてくださいました。

クリスチャンの指導者には、神の民を導く務めがあります。ですから、偽りの教えには断固として立ち向かい、神に背く信徒を正す心構えが必要です。しかし、兄弟間の一致を守るために、問題を起こす人を神が正してくださると信頼して指導者が謙虚にならない場合もあります。

争いが起こった場合には、教会の交わりの中におけるクリスチャンとしての証を守るために、思慮深い判断力が必要となります。

アブラムには、そのような判断力がありました。ロトに土地を先に選ぶ権利を譲ったことで、争いを解消し、家族関係を守りました。

例

聖書には、謙虚になれなかった人たちの例が数多くあります。その結果、争いが長年にわたって続きました。

サウル王はその一例です。彼は、神のはっきりとした言いつけに背いたので、イスラエルの王の座を追われました。その後も、神がダビデを王として選ばれたことを受け入れられませんでした。何年にもわたってダビデを殺そうと追いまわしましたが、最終的には自らの命を絶つこととなります。サウルがへりくだろうとしなかったせいで、彼自身だけでなく多くの人たちが命を落としてしまいました。

指導的立場にいる人間にとって、謙虚になるのは難しいことです。しかし、それが必要な状況においては、その謙虚な行いを神ご自身が尊重し、祝福していただきます。

謙虚さについては、新約聖書にも数々の約束があります。

1. へりくだる者に神の恵みが与えられる。（ペテロ第一5：5、ヤコブ4：6）
2. 時がくれば、神がへりくだる者を高くしてくださる。（ペテロ第一5：6）

謙虚さのすばらしい模範を示してくださったのは、イエス・キリストです。

ピリピ2：5-11 2:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。 2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、 2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、 2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。 2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。 2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、 2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

イエスは、自ら謙虚になられましたが、神がイエスを高くあげてくださいました。

3. ロトの選択 — 肉の目で物事を見る。（1-13節）

10-13節には、ロトが所有物を持って家族と住むのに選んだ場所とそこを選んだ理由が記されています。

10節に、ロトが目を見てヨルダンの低地全体を見渡すと、主の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた、とあります。

ロトは、一番良い土地を選びました。農業にも酪農にも適した土地です。

しかし彼は、人間の目でしか物事を見ていませんでした。肉のことだけを考えていたのです。

ロトはソドムの近くまで天幕を張ったと聖書は語ります。13節には、ソドムの人々はよこしまで、主に対して非常な罪人だったと記されています。

ロトは、人間的に見て一番良い土地を選んだかもしれませんが、霊的には、ソドムの人々からの誘惑や攻撃を受けやすい状況に自らを置いてしまいました。ソドムの近所に住むことの危険性をロトが認識していなかったのでしょうか。それとも、肥沃な土地が魅力的だったので、その危険性を無視してしまったのでしょうか。どちらにせよ、ロトがどこに移り住もうかと神に尋ねなかったことは確かです。神は、ロトが自分で選ぶままになさいました。それがロトと家族にとってどれほど愚かだったかは、後に分かります。

ここで、大切な教えを学ぶ必要があります。

私たちは毎日あらゆる選択を迫られます。些細なこともあります。人生を左右するような大きな事柄もあります。ほとんどの場合、その決断が後に自分自身や家族にどのような影響をもたらすかまったくわかりません。

ですから、どんな決断や選択でも恵みの御座に携えて行き、賢い選択をできるように神の助けを求める必要があります。多くのクリスチャンは、神に相談せずに決断し、自分の決めたことを祝福してくださいと神に求めます。

これは、間違ったやり方です。私たちは、まず神に尋ねなければなりません。そして、神の導きを待ちつつ神の御声に耳を傾けます。ときには、神の答えを聞くのにずいぶん待たなければならないこともあります。しかし、一旦神が語られ、チャンスの扉を開いて導いてくださったら、信仰をもって前進する必要があります。

将来のことをご存じなのは神だけです。それは、神がすでに未来におられるからです。また、私たちにとっての最善を私たち自身はわからなくても神はご存知です。

神は私たちを愛し、すべてを知り、心にかけてくださいます。そして、神にすべてをゆだねる人に、最善を与えてくださいます。

賢い選択をすることについて私ができるアドバイスは、聖書を読むことです。聖書は、霊の目を開いてくれます。そうすると、私たちは神がご覧になるように物事を見て、神の教えに沿った決断をすることができるようになります。

聖書が記されたのは、時代や文化を越えて、神がすべてにおいて私たちを導かれるためです。

聖書は霊的な書物です。私たちは霊の目をとおして、聖書から学びます。神はご自身のみことばをとおして語られますが、私たちは常にそれに耳を傾け、その真理を生活で実践しなければなりません。

4. 神からアブラムへの励まし (14-18節)

10節には、ロトが目を見て肉の目で物事を見たことが記されています。次に、14節では、神がアブラムに「目を上げて」とおっしゃいます。しかしこのとき、それはロトのような人間的な目ではありませんでした。神は、アブラムに霊的な目で見ると語られたのです。

神はアブラムに、人間的な目では見えないものを見るよう語られました。信仰の目をもってのみ見られるものです。神はここで、約束を成就するのに必要なことを起こす力が神にはあると約束なさいました。

神は、土地についてアブラムを励まされました。また、子孫についても勇気づけられました。数えられないほど子孫が増えるというのです。

この約束について今日私たちが注目すべきなのは、これが未来のことであるという点です。アブラムは死の直前でも土地と民についての神の約束を信じていましたが、まだ実現していませんでした。

ヘブル11：8-13を読みましょう。

11:8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

11:9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束とともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。11:10 彼は、堅い基礎の上

に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。**11:11** 信仰によって、サラも、すでにその年を過ぎた身であるのに、子を宿す力を与えられました。彼女は約束してくださった方を真実な方と考えたからです。**11:12** そこで、ひとりの、しかも死んだも同様のアブラハムから、天の星のように、また海べの数えきれない砂のように数多い子孫が生まれたのです。**11:13** これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。

13節が今日の私たちに関わるポイントです。なぜでしょう。

では、ヨハネ**14：2-3**を読みましょう。

14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。**14:3** わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

私たちがアブラムと同じ状況に置かれています。イエスは、私たちがまだいただいていないものを約束なさいました。クリスチャンとして多くの恵みに与っていますが、この個所に約束されたことはまだ実現していません。

私たちがアブラムと同じ立場です。イエスの約束を霊の目で見ています。

この約束を握りつづけられる理由は何でしょう。

その答えは、約束をされたお方の品性にあります。「もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。」というイエスのことばを思いだしてください。

次に、**17節**には、「立って、その地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに、その地を与えるのだから。」という神からアブラムへのことばがあります。

当時、王たちは獲得した土地を歩き回ってその土地が確かに自分のものになったことを確認しました。

神はアブラムに、この土地をわたしがあなたに与えるのだから、どんな土地をもらったか見て回ってはどうか、とおっしゃったわけです。未来を垣間見るようにアブラムに勧められたのです。

ついに**18節**には、アブラムが天幕を移して、ヘブロンにあるマムレの櫨の木のそばに来て住んだとあります。彼はそこでも主のために祭壇を築き、神を礼拝しました。個人でも集団でも神を礼拝するのは、何よりも元気づけられることです。

しかし、神を礼拝するためには、神を知る必要があります。賛美を聞くとその教会の霊的な温度がうかがえる場合があります。よく知らない神を礼拝賛美することはできないからです。

聖書の神をちゃんと知りたかったら、今日知ることができます。どうか礼拝後に残って、誰かにそのことを話し、いっしょに祈ってもらってください。

神が心に語りかけてくださったら、先延ばしにははいけません。今日が救いの日です。